

# 新しい平和運動として新たな平和博物館をはじめ

リー・デフン

## 1. 平和博物館の運動概観

戦争博物館に比べて平和博物館の歴史は非常に短く、数も圧倒的に少ない。

戦争記念施設あるいは戦争博物館を持っていない国は地球上にほとんどないが、平和博物館が存在する国は下に見るように大変少ない。

アメリカの場合、数を数えられない戦争記念施設に比べて、平和を題目にする平和博物館はシカゴにある平和博物館が唯一である。国内にも真の意味での平和博物館は存在していない。

ただし、韓国と関わる唯一の平和博物館には遠くオランダのハーグに「リー・ジュンの平和博物館」がある。

戦争博物館と戦争記念施設は伝統的に「戦場での偉大な行動」と「戦争英雄」に対する記憶を中心に置いて「戦争の惨状」を偉大な行動と英雄の正当化のために配置する。

「戦争の惨状」は大部分の場合、自国の被害に焦点を合わせて、他人に対する加害は軽視される。それゆえに戦争記念館は「国家」と「民族」に対する狭小な所属感を引き起こす社会的、教育的効果をもたらす傾向がある。

これに比べ平和博物館は戦争に対する国境を越える倫理的考察と戦争を防ぐために努力した人びとに対する関心、巨大な暴力に対する市民の考察、平和に対する普遍的熱望に焦点を合わせる。狭小な国家観や民族意識よりもっと広く深い歴史的、倫理的考察を提供する。

戦争博物館はさまざまな区分で成立している。戦争・平和の主体は普通に国家・軍であり、民間人は被害者に区分される前提が珍しくない。その中でも英雄と戦争行為者らは大部分男性であり、女性は主に被害者だけに表現される。男性の中でも健康な体格、体力、精神を持つ民族的に「正常な」男性が最も積極的な行為者であり、被害者や周辺層、敵軍を構成する人たちは可憐であり、奇異であり、邪悪に、つまり非正常的

に表現される、正常・非正常の区分法がときどき適用される。あるいは、正常な軍人たちが使用する武器と戦闘行為が展示の中心に置かれ、生活上の物、例えば家屋、服、布団、工芸品、芸術品は戦争の被害対象に区分される。すなわち、武器・戦闘行為は変化を引き起こす積極的行動と手段であり、生活上の物はその対象によって消極的な行動と手段に表現される。平和博物館の展示は民間平和運動、女性平和運動、平和を象徴する絵、詩、ハンカチ、布切れ、人形などのさまざまな展示物を通じこのようなさまざまな区分・差別に対してより深い考察を提供する。平和博物館の運動は「戦争メッセージ」と「平和メッセージ」に大きな間隙が存在すると見る。このような考察は平和運動に大きな意味を持っている。

戦争博物館に対する明白な対称概念として平和博物館の概念は、20世紀初、スイスとオランダなどでいくらか、平和思想者たちによって主唱され、そのはじめの施設物がハーグ平和宮の設立に現われた。1925年平和博物館の運動の創始者とみなされるエルンスト・フリドリヒの反戦博物館がベルリンに作られたが、1933年ナチ軍によって破壊された。初期の平和博物館の主要展示の概念は、戦争の惨状を露骨に展示して、戦争に対する嫌悪感を高めることであった。戦争の惨状に焦点を合わせる展示概念は、平和博物館の重要な伝統を形成してきた。これによって主要戦跡地に平和博物館が作られ始めた。

冷戦時期の日本と欧米での平和運動は、平和博物館の運動にも大きな影響を与えた。ベトナム戦のアメリカを除外し、戦争の惨状「記憶」が博物館に動員されなかった。米・ソ間の核戦争の可能性は戦争予防のための社会的教育に焦点を置くように要求した。これから1970 - 80年代以後の平和博物館の運動には、平和教育と平和運動に焦点が集まりはじめた。否定的展示概念に肯定的展示概念が導入されはじめた。イギリスのブラドホード大学の平和博物館とケニアで準備中であるアフリカ平和博物館、オスロのノーベル平和賞博物館が代表的な例に属する。日本の立命館大学国際平和

ミュージアムも肯定的展示に力点を置いている。

1999年5月ハーグには、ハーグ市が国際平和のために努力するさまざまな平和会議と外交活動に焦点を合わせる平和博物館が設立された。同時にコスタリカで中南米での平和努力を総合する平和博物館が推進されているし、国連平和維持軍の活動に焦点を合わせる平和博物館も企画されている。

付け加えて、1998年11月日本の京都と大阪で開催された第3回世界平和博物館会議を通じて多様な平和博物館の相互連携と協力及び共同研究が合意され、推進され、平和博物館運動は国際的に戦争博物館に対比される明白な代替的展示館運動に浮上している。

## 2. 平和博物館の多様性

平和博物館は反戦の展示空間（ベルリンの反戦博物館）から勝者の立場に立つ戦争博物館（フランスの反ナチ博物館ら）、特定の人のおこないで「平和」の主題を再解釈する人物博物館（リー・ジュン平和博物館）、人道主義的行為を強調する博物館（ナイティンゲール博物館、赤十字博物館）、平和主義の博物館（イギリスのブラドホード平和博物館）まで、多様な形態が開発され、設立されてきた。しかし、いくらかの傾向的特徴を観察できる。

第1に、これらは既存の世界的な「戦争博物館」の伝統に反して、具体的に「平和博物館」という名前を選択することによって、新たな概念と趣旨の開拓的な展示空間の運動であることを明らかにした。これは戦争及び暴力にかかわる国際的あるいは社会的現状を特定の立場で解釈しようとする、社会的要求を反映した。このうちで核心的なのは「戦争の正当化」、「武力行使の称揚」に対する拒否と代替提示の要求である。

さらに第2に、平和博物館の多様性は「代替提示の要求」を反映する。ガンディの非暴力精神に焦点を合わせるインドのガンディ関連博物館と赤十字など人道主義活動に焦点を合わせる所、アンネフランク博物館などが、平和博物館の運動・ネットワークの一環であることがこのような理由である。

第3に、平和博物館は独自の空間に止まらず「社会的拡大効果」を志向する。多くの平和博物館が空間の制約を認識し、「移動式展示」を積極的に推進しているし、既成の博物館、甚だしくは戦争博物館でも展示空間のために協力している。つまり、平和博物館は既存の展示空間に新たな空間を創出する効果を拡大させる。今までは主に博物館と主要イベントという空間でこのような拡大が出来たが、先には生活の中の空間ま

で拡大するように予想される。

第4に、このような拡大効果はユネスコの事務総長が強調した通りに、汎地球的な「平和文化の拡大」を反映するものである。これは最近アメリカ・イラク戦とかかわる、汎地球的な反戦・反米示威で現れたように、汎地球的な反戦情勢の拡大と軌を一にする。すなわち、平和博物館の運動は国際的な反戦、反覇権、反暴力情勢の拡大を反映する重要な平和文化運動である。

このような平和運動として、平和博物館の運動を最も深く考察すべき難しい質問は、なぜ各社会で戦争博物館が圧倒的であるかという質問である。もちろん、たやすく国家の戦争記念施設が戦争史ほどに長い伝統を持つ事実を挙げうる。莫大な国家的支援と制度教育を通じる施設の拡充と維持および社会的効果を創出してきた。これは密やかな制度的強制の側面である。

同時に戦争の博物館には社会的同意の側面も存在する。戦争という強烈な経験と戦争英雄に関する賛美といわゆる敵国に対する憤慨心あるいは敵愾心は、共同体を結束させる。戦争記念館の基本哲学は国家共同体の結束にあるし、ここに「戦没者の追慕」、「戦争英雄・軍人の賛美」、「敵国に対する否定（蔑視と憤慨）」が主要動機として使用される。

批判的に考察すると、追慕と称揚に対象は多様でありえるし、他人に対する否定は歴史意識の制約、自国の他国侵略など、我らの暴力行為に対する沈黙と対比しうる。しかし、戦争博物館が暴力に対する主流展示空間の立場を占めるようになるのは、戦争博物館の動機が社会の支配的な議論とたやすく結合できたためである。例えば、家父長制、保護・被保護の2分法、正常・非正常の2分法、国家絶対主義思想、国際政治に対する諦め、運命論的態度などと結合されている。だから、平和博物館は「趣の異なる展示」に限らず、戦争博物館を正当化する社会的認識、歴史認識、世界観に対する批判的接近を含むようになり、それほど平和運動と緊密な連関性を持つ。

## 3. 韓国の平和博物館運動の志向性

平和はたやすく暴力的な葛藤の平和的縮小を意味することと見られる。平和博物館はこのような意味の平和、展示、教育など3つの主題を結合する社会的空間である。

まず、教育面で平和博物館は戦争博物館と違う総体的教育を志向する。総体的教育とは、あらかじめ選択された教訓を一方的に伝え、知識の習得を勧める垂直

的教育ではなく、自己考察、相互作用、批判精神、認識拡大、否定・肯定の弁証法的認識発展、多様性の理解、論争を通じる考察的教育を意味する。

博物館はこのような考察的教育が起こる1つの社会的空間であり、「展示」は狭義の展示から「展示されること」と「展示したいこと」が交差する相互作用の空間として理解できる。それゆえに、平和博物館は視聴覚的な感覚媒体を通じる展示だけではなく、自らの考察的教育をする人たち間の交流をおこなう空間でもある。この交流は地域、1国、国際水準で展開できる。

平和博物館と対称的な主題として、「戦争」は国家間の行為を正当化し、あるいは歴史上普遍的であるように認識される傾向がある。平和博物館で「平和」が単純にそのような「戦争」に反対することに設定されるのは矮小化である。戦争は国家間あるいは民族集団間の武力による葛藤を意味することとして、葛藤を暴力的に解決する社会現状の1つであり、国家の行為であるから特別にもっと正当化したり、特殊化したり、例外的であるとみなす傾向にも批判的態度を持つ必要がある。社会的交流空間としての平和博物館は、最も強烈な経験である「戦争経験」を含むが、「葛藤の暴力的解決」に対する批判的考察と代案の模索という哲学を持つ。

平和博物館は他の社会的現状と同じようにその社会、その地域社会に密接する連関を持つべきである。普遍的な平和博物館のモデルは存在していない。普遍的な平和教育のモデルも存在していない。したがって、平和博物館の運動はその社会、その地域社会の特性と具体的経験から出発し、他の社会の事例を参考する内容を追加する構成を持つべきであろう。ここで「生活の中の博物館」という趣旨が出る。

平和博物館の展示は「苦痛の記憶」から出発する。この点は戦争博物館と大きく異なる。しかし、平和博物館は「苦痛の記憶」を憤慨と戦死者・英雄賛美に限らず、自己考察と連帯感に拡大することを主におこなう。苦痛の記憶を自己考察に深化させるには人為的な二分法的思考を克服することが非常に重要である。戦争の構図で強要される国家・社会、軍人・民間人、男性・女性、善・悪、正常・非正常、敵軍・我が軍などの人為的な区分を越える思考を提供すべきである。ここで「我らの苦痛」に「他人の苦痛」を交差させ記憶することが主要であろう。つまり、苦痛という強烈な経験の記憶行為を通じてわれわれと他人の警戒線に対する批判的考察を可能にして、憤慨心や賛美のような垂直的認識から脱皮し、暴力の前で似通ってい

ようになる人たち間の連帯感を涵養するよう進む。

平和博物館の展示内容はこのような趣旨を反映するようになる。つまり、戦争と暴力的な葛藤状況で伝統的に被害者、消極的主体、非正常的な主体、周辺部、敵、女性、平和主義者、戦争拒否者たちがどのような経験をおこない、どのような努力をおこない、どのような感じと考えを表現したのかに注目する。「生活の中の博物館」という趣旨はこのような内容を密かに排除した国家主導、巨大集団主導の大型施設物としての戦争博物館と対比される。

#### 4. 韓国の平和博物館運動の概念と主要計画

このような背景に基づいて韓国で最初に真の意味の平和博物館運動を始めることは意味が大きい。その核心的な概念はベトナム戦の真実委員会が適切に捉えたとおり「苦痛、記憶、連帯」の精神が非常に素晴らしい。同時に今回、平和博物館の推進努力は〈朝鮮半島で最初の平和博物館運動〉という意義を持つ。ベトナム戦に参加した国家である韓国での平和博物館の「平和」は、戦争博物館の「戦争」と対比されるように、このような精神は進んで〈記憶を通じる苦痛を与えられた人びととの連帯〉、〈苦痛と憐憫を乗り越える平和〉、〈記憶と考察からえられる歴史紀行〉という標語に表現できるだろう。

平和博物館の設立目的は；

- ・戦争の惨禍を経験する人びとの記憶を記録
- ・戦争の記憶と平和意識の形成と連結
- ・戦争による被害と苦痛を分かちあって生命と人権の価値を想起
- ・平和を愛する市民たちが連帯感と参加精神の涵養
- ・「生活の中の平和博物館」のネットワーク、などに設定できるだろう。

同時に平和博物館運動の趣旨はこのようにも説明できる。

- ・新たな概念の平和歴史館建立・教育運動の初め及びネットワーク
- ・韓国と関わった戦争及び平和に献身した個人と団体の記録と資料を収集
- ・以上の記録と資料を平和教育の趣旨に沿って取捨選択、展示、教育機会に活用
- ・平和運動及び平和研究者たちの調査、研究に寄与する歴史資料館
- ・人権・反戦・平和の価値と哲学を教育、市民社会の成熟に寄与

・戦争と関わる和解と真実の媒介役割

韓国社会で平和博物館の設立はいかなる概念を展開するだろうか。

まず、平和博物館は既存の戦争博物館の慣行に対する代替として、反戦平和の価値を明らかにする社会的記憶運動を、最初に本格的に開拓する意味がある。また、ベトナム戦への参加に対する謝罪と和解運動を基盤として推進することであるから、歴史的反省や和解の意味と価値をもっと普遍化させ、深化させるきっかけになるだろう。

第2に、この平和博物館運動は単純な施設の建設に限らず、市民参与(参加)型、ネットワーク型の博物館運動に、新しい世代の感覚に合う歴史教育の運動として位置付けられる。社会の各分野の市民、そして学生、教師など各自の小さい記憶、記録、平和の願い、文芸作品が大切に保管され、展示される空間をおのこの生活の拠点に小さな希望を開くことによって、たやすく広範囲に平和文化が「展示」され、「記憶」となる。このような展示と記憶が巨大な施設の管理組織ではなく、生活の中の市民参加を通じて可能になることに大きな意義がある。これを「生活の中の平和博物館」として概念化することであり、初期にはまず平和運動団体、平和志向の教育空間の先駆者たちが模範的に設置し、拡大できればいいだろう。

第3に、このような意味を活かすために平和博物館はサイバー博物館を主要な構成に持つべきである。ネットワーク型に散在する実際の小規模の博物館運動をサイバー上で連係させて、ベトナムなど遠い所の施設と近い所の施設、生活の中の展示空間が効果的に結び付けられる。これは広報効果、参加効果、接近性、参加の面で効果を創り出せるだろう。

第4に、現在の教育現場及び宗教機構などで実験的に進行している初歩的な平和教育がより体系化され定例化される空間と機会を提供して現場での平和教育を支援するようになる。これは平和運動の拡大にも重要であろう。

第5に、平和博物館運動は国内の多様であり、広範囲である平和展示施設と連携を拡大し進んで、これに基づいて海外の平和博物館と連携し、国際ネットワークを形成できる。

そうして、「平和の歴史」を「戦争史」に対比させる大きな流れを形成し、国際的な反戦世論の鼓舞に参与し、ここに韓国の平和運動、平和研究者らが積極的な役割が果たせるようにすべきであろう。

その外にも平和博物館は特化される歴史資料室、特

化される平和研究センターの機能を果たして平和研究を活性化させるきっかけになるようにも作用する。

平和博物館の構成はさまざまな方策がありえる。まず、展示・資料収集のテーマには平和のイメージ、暴力の惨状と非暴力精神、戦争拒否、反戦行動の人間的な記録、平和運動、軍縮、平和関連法制と国際機構、人権、紛争調整、生態主義的平和思想、未来と市民役割などが考えられる。

展示・収集資料の種類も資料、記録、手記、絵、写真、彫刻、工芸品、ポスター、文学作品、視聴覚物、軍縮象徴物、平和運動の小品、平和思想者・平和指導者の寄贈品など、多様である。平和博物館で提供する教育プログラムの種類にも、博物館研修、教育機関や社会団体の平和研修、記念式、平和教育者・紛争調整者の研修・訓練プログラム、平和映画祭、地域社会の成人教育プログラム、派遣展示会、文芸発表・詩朗唱、児童劇、口演発表、平和ゲーム、演奏会、文化交流・地域社会の外国人交流の集い、「生活の中の平和博物館」運動キャンペーンなど、大変多様な方式が可能である。

平和博物館はこのような教育プログラムを通じて、その地域社会の教育活動に重要な寄与をする。その社会、特に地域社会にもさまざまな肯定的な効果や利益をもたらせる。平和博物館は規模にかかわらず、地域社会で地域社会の主要な名所を創出することに寄与する。特に、小規模の特化される名所がもっと脚光をあげ、今後の趨勢に従って小規模の平和博物館は、地域社会のイメージと魅力を高めることに寄与できる。

特に、平和博物館は戦争記念施設が存在することに比べて、その地域社会にとってより円熟した深みのある地域文化の形成に寄与できるであろう。平和博物館の教育、文化行使を通じて地域社会の構成員たちは、じょじょに影響を受けるが、これはその地域社会の成熟と統合性にも肯定的効果をもたらすであろう。

排他的な1国的感性に訴える戦争博物館と違って、平和博物館は国際的理解と感性をすすめ、そのような活動が展開される空間となる。特に、現在のように1つの戦争が持つ国際的影響と平和博物館間の国際的連携を念頭に置く時、平和博物館が所在する地域は、地域住民の平和感受性と国際感覚の成熟にも一定の寄与をするだろう。

これ以外にも平和博物館は地域社会に国内外の観光客のための新たな感覚の観光地を創出する効果をもたらし、さらに、地域指導者たちのイメージを高めること及び広報効果も期待される。あるいは運営すること

新しい平和運動として新たな平和博物館をはじめ (リー・デフン)

によって新たな感覚の新レジヤ空間の創出、新たな感覚の地域化される教育機関及び教育力量の創出、地域経済への一定の寄与、青少年の教育プログラムの多

様化、ボランティア空間の拡大などが期待できる。

(報告者 平和博物館センター)